

令和4年度 校内研究（算数科）の概要

1 研究主題

小中連携による基礎基本の定着や活用力を高める授業改善を目指して（2年次）
～喜んで学習に取り組む算数科の授業づくりを通して～

2 主題設定の理由

平29年度に公示され、一昨年度から完全実施となった小学校学習指導要領では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、生きて働く「知識及び技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養の三つの柱で整理されている。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善を推進し、子供たちがこれからの時代に求められる資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにすることが求められている。

本校は、一昨年度までの2年間自己肯定感が低い児童やQ-Uアンケートにおいて要支援群に位置している児童がどの学年にもいることから、道徳科の授業の充実や学級経営を通じた支持的風土づくりを目指した特別活動の研究を行ってきた。昨年度からは、2年計画の「小中連携による学力向上推進地域指定事業」を受け、中学校区と連携しながら研究を進めていく。昨年度の佐賀県学習状況調査の結果を見ると、学年によって県の平均値との開きに違いが見られる。また、CRT学力検査においても、低学年のころから全国との開きが大きい学年もあった。また、全校児童に実施した意識調査においては、問題解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいるかの質問に対して肯定的な児童が多かったものの、否定的に答えた児童が25%（4分の1を占めている）という状況であった。また、授業中の様子として、長文を見ただけで諦めたり、学習への意欲が低かったりするなどの実態も少なからず見られる。

そこで、昨年度に引き続き、何を学び何ができるようになるのかという目的意識や課題意識を児童自身がはっきりもつことのできる授業、日常生活との結びつきを意識させるような授業を展開していくことで、児童が自ら喜んで問題を解こうとしたり、これまでに習ったことを使って考えたりする姿を目指していく。

3 研究主題の考え方

「喜んで」をどのように捉えるか。

低学年：操作活動や話し合いの中で、自分の考えや理由を何らかの表現で伝えようとしている姿。

中学年：これまで学んだことを生かし、いろいろな方法を試しながら自分で解決しようとする姿。

高学年：これまで学んだことを生かし、自分なりの方法で問題を解き、表現したり学び合ったりして問題解決している姿。

具体的には、問題との出会い、一人調べ、話し合い等の活動中における発言や態度、ふりかえりやノートにおける記述の中で、以下のような姿を目指す。

低：「これなら、できそう。」「やってみたい。」「分かった。」「できた。」「かんたん。」「あっ、そうか。」「家でもしてみたよ。」「こうしたらいいよ。」「～の方がいいよ。」「こうかな。」「どうかな。」「

中：「〇〇が使いそう。」「前の時間のノートを見てみよう。」「(途中までも含めて)分かった。」「絵や図をかいて考えてみよう。」「〇〇さんの考えを聞いて分かった。」「はじめは分からなかったけど、〇〇したらできた。」「ヒントが欲しい。」「またしたい。」「もっとしたい。」「もう少しでできそうだから、待って。」「できた。」「簡単。」「もっと難しいのがやりたい。」「家でも続きをやってみたい(自主学習)。」

高：低・中学年の様子に加えて 「つまり・・・」「まず、次に・・・」

- ・時間になっても解き続けようとしている。
- ・自ら問題を作りたくなっている。
- ・友達に自ら伝えたり教えたりしている姿。
- ・生活の中から算数を見つけ出している。
- ・苦手なことを自覚して、乗り越えようとしている。

4 研究の目標

算数科における単元の導入や算数的活動などを工夫し、喜んで学習に取り組む児童を育てる授業づくりについて研究する。

5 研究の内容と方法

(1) 活用力を高める授業づくり

「授業づくりのステップ1・2・3 Vol. 1」「授業づくりのステップ1・2・3 Vol. 2」を活用する。「めあて」と「まとめ」の提示、毎時間の「振り返り」、1時間完結型の授業など小中で共通した授業スタイルを確立する。また、全国・県学習状況調査の問題を活用し、課題に応じた授業を展開することで教師の授業改善と指導力の向上を目指す。

本校では、授業づくりの改善として、単元の導入やまとめの段階を工夫したり、日常と学習の結びつきを児童が実感できるような算数的活動を仕組んだりする。また、教師の授業力向上のために講師招聘による理論研究や研究授業を行う。

(2) 基礎学力の定着

基礎学習・ドリル学習を時間割に組み込み、計画的に実施する。また、授業の中で「話し合う活動」や「書く活動」を設定し、児童が学び合う中で基礎基本の定着を図る。

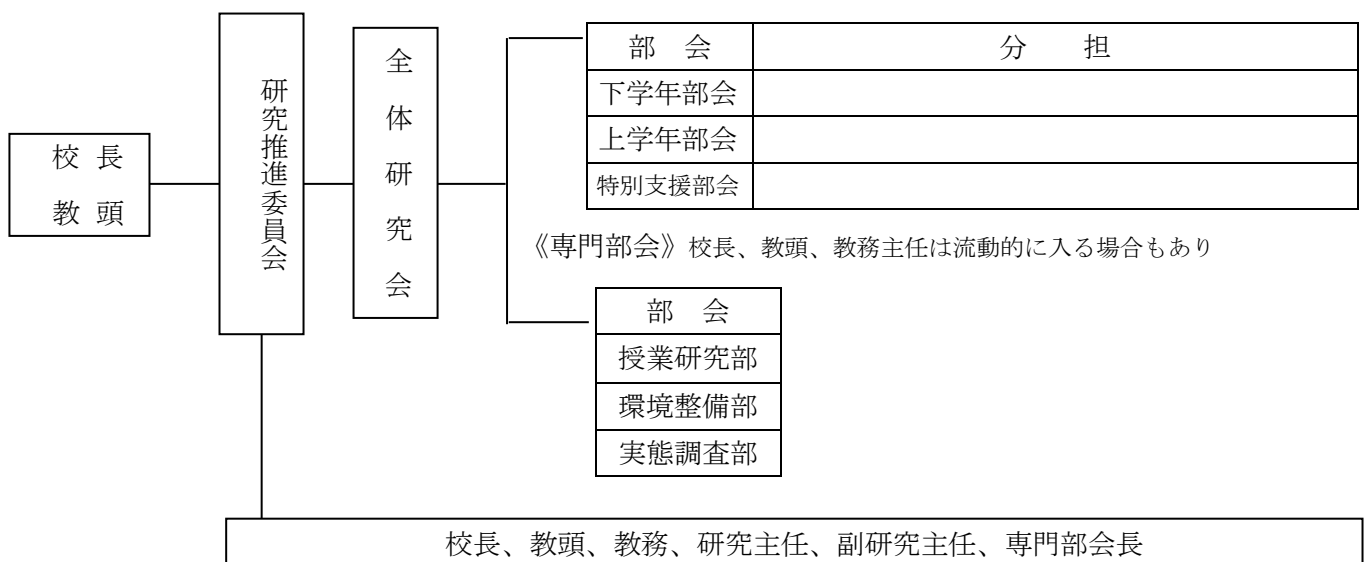
本校では「すっきりタイム」とよび、毎週定期的に取り入れることで、個々の計算力と視写力を高める取組を実施する。また、既習学習が身に付きやすいように、教室内に算数用語を掲示したりノート指導を行ったりする。また、タブレットを活用した方法も模索していく。

また、家庭学習習慣の定着や規則正しい生活習慣を確立するため、家庭でのタイムスケジュールを自分で作成し、計画に沿って過ごす活動を取り入れる。

6 研究の組織とその内容

(1) 組織の構成

《グループ学年部会》校長（上学年）、教頭（下学年）、教務主任（下学年）



(2) 組織の内容と役割

① 研究推進委員会

研究テーマの理論の追及と実践方法の研究、企画・立案、研究日程計画、研究推進の円滑な運営を図る。

② 全体研究会・・・原則として年に1回以上公開する。(二里小、国見中は必須。その他はコロナ禍などの状況を踏まえて公開)

指導案の検討、研究内容・方法等についての検討、授業研究会を実施、その事前伝達会・事後研究会を行う。

③ グループ学年部会

研究内容の具体的実践、授業実践における研究成果の記録と研究資料の提供等を行う。

④ 専門部会

ア 授業研究部

単元や1単位時間のまとまりの中で振り返りの場面、対話する場面、児童が考える場面、教師が教える場面が分かる指導案の形式の提案を行う。日常の事象と結びつけた導入や算数的活動の情報収集・提案、活用問題を取り入れた授業づくりを行う。

イ 環境整備部

基礎的・基本的な技能の定着に向けた取り組み(すっきりタイム)の充実、算数ノートの手引き作成、既習事項(用語、公式)定着のための環境整備を行う。HPに取り組みの様子を掲載する。また、タブレットを活用して小テストの作成や振り返りの積み重ね方等を紹介する。

ウ 実態調査部

児童と教師の意識調査、学習状況調査の分析を行い、児童の学習に対する様子や学習に必要な力を探り、その結果を職員や家庭、地域に広げていく。中学校区で連携して、定期テスト期間中に「スタディウィーク」を実施する。また、家庭でのタイムスケジュールを作成する。

7 年間計画

月	日	曜	内 容
4月	7	木	第1回校内研 推進委員会（学状・CRT 結果報告、研究副主題など決定）
	27	水	第2回校内研 全体会（研究の概要、全体計画提案） 終了後に学年グループ内で授業者、授業日程決め ⇒後日、専門部決定
6月	1	水	第3回校内研 全体会（組織確認）、専門部会（目的、内容計画決め、活動開始）
	15	水	第4回校内研 全体会・専門部会 （授業者の確認、各専門部より年間活動計画などの提案、全体確認） （各専門部で活動）
7月	13	水	第5回校内研 専門部会（各専門部で活動）
	22	水	第6回校内研 グループ研・専門部会
8月	4	木	第7回校内研 グループ研（指導案検討会）
	24	水	全体会(講師招聘) 「子どもの意欲をかきたてる授業づくり～学び合いを軸にした教師の手だての在り方～」
	31	水	第8回校内研 全体会・グループ研（指導案検討会）
9月	7	水	第9回校内研 ★全体研
	14	水	第10回校内研 ★全体研
10月	26	水	第11回校内研 ★全体研
11月	9	水	第12回校内研 ★全体研
	25	金	第13回校内研 ★公開授業研究会
	30	水	第14回校内研 個人研（研究授業の振り返り）
12月	21	水	第15回校内研 全体会（まとめについての説明） 専門部会（まとめの分担）
1月	18	水	第16回校内研 全体会(出張報告会)
	25	水	第17回校内研 グループ研（まとめ）
2月	8	水	第18回校内研 専門部会（まとめ）
	中旬		研究冊子 印刷・製本
	22	水	第19回校内研 全体会（年間のまとめ、次年度について）

(2) 研究授業及び授業研究会の進め方

- ・ 全体研・・・ 学年グループによる指導案事前検討会を経て、職員全員が参観し、全体で授業研究（事後研究会）を行う。全体で3本実施。
全体授業研究会の会場は図書室、司会は学年グループで行う。
- ・ グループ研・・・ 全体研を実施しない学年が、学年両クラスとも同単元内容の授業を行う。学年どちらかの授業を参観し、事後研を実施する。グループ学年以外も自由参観は可。